

## 國語史上より見たる「シラス」と「ウシハク」

安 藤 正 次

私は國語の歷史上、言葉の歴史の方から見た「シラス」と「ウシハク」についての考を申したい積りでありました。ところが、唯今、白鳥先生の御話がございまして、殆ど私の申上げますやうなことを御つくしになりました。併し折角參つたものでありますから、私は私だけの考を極簡單に述べ、猶、唯今白鳥先生から御話のございました中に、私の考へましたこと、少し違つて居る所がございしますので、それに關する私の意見を述べて、更に先生の御示教を仰ぎたいと考へる次第であります。

先づ、第一に、シルといふ言葉に就て、自分の考を申上げます。私の申上げるのは、専ら、言葉に關係する方面ばかりでございまして、甚だ乾燥無味であり且つ複雑して居りますから、少し御聽苦しいか存じませぬ。そこで順序として、はじめに申上げておきたいのは、日本の言葉の上では、動詞などに於て、語幹に、造語的構成的の成分がついて、言葉の意味を色々分岐させる、例へば、同じ動詞の語幹にR、K、Mの三つの子音がそれ／＼結び付くによつて、少しづつ、の意味の相違の出來るといふ著しい現象があるといふことであります。尤も、是は、唯今申上げましたR、K、Mばかりでございませぬ。尙、外にも色々ご

ざいますが、今日御話申上げる上に必要なものは唯今申上げました三つであります。シルといふ言葉の語意を明らかにし、他の類似の語との関係を見る上に於ても此の現象についての考察が必要であります。シルといふ語について、此のK、R、Mの関係を見ると、次のやうな三つの語があります。

Si—	}	R—u(知)
(shi)		K—u(敷)
		M—u(占)

シといふのがルートと申せばルートでありますが、それがR、K、Mに互りまして、シル、シク、シムといふ三つの言葉が出来て居る。先程、加藤博士が、シルとシクとは同じではないかといふ御話でございましたが、大體に於て、私もそれと同様な考を有つて居ります。萬葉集卷三に

天皇之敷坐國爾

萬葉集卷六に

荒野等丹里者雖有大王之敷坐時者京師成宿

萬葉集卷八に

須賣呂伎能之伎麻須久爾能安米能之多四方能美知爾波

などどあり、尙萬葉集の一の巻に

虚見津山跡乃國者押奈戸手吾許會居師吉名倍手吾已會座 (萬葉集古義の訓による)

といふ言葉があるのを見、更に加藤博士の述べられたやうに、祝詞などに、宮柱太知立と宮柱太敷立とを同じやうに使つてゐるのを考へ合せれば、大體シルとシクとは同様に用ゐられたと見てもよいやうですが、猶その間に相異なつてゐる點もあります。それは後に申述べやうと思ひます。シムの方は、概して、占領するといふやうな意味に使はれて居りますが、占領すると解釋すると少し語弊があります。兎に角、或一定の範圍を自分のものにするとか、或は、或場所を自分のものにするとか、さういふ意味に用ゐられて居ることが多いのであります。尙はシル、シク、シムの系統に屬する言葉を擧げて見ますと、シルといふ言葉から出たものには、シルシ(著)とかシルス(記)とかいふやうな類があります。此等は、一つのものその他のものが分明に區別されるとか、或物を明らかに區別するとかいふやうな觀念を有つて居ります。物を知るといふ意義から、かういふ義が出るのは當然であります。シクの方は、同形の語では、物を敷く意味のシク、(及ぶ)といふやうな意味のシク、(如し)といふ意味のシクがあり、系統的の言葉では、シキル(類)、シコル(萬葉十二、思許利來めやも)シゲル(茂)といふやうな言葉があります。すべて此等を通じて、或物が結び付くとか、相重なるとかいふ意があります。此は、精神上にも物質上にもいはれ得ることです。シムの方では、漢字の占の字の意義もあり、此處は或特定の場處であるとか、此は自分のものだ

かいふやうなことを標榜する標の字の意味も出て來てゐますし、シメス(示)といふ語もこれから出てゐます。先程、白鳥先生も御引きになつたやうに思ひますが、締メルといふシム、或は物の凍ることをシムといふのも同系統であります。助動詞になつて居るシムといふ言葉も同じ系統のものと思はれます。兎に角シル、シク、シム、及び其の系統に屬する言葉は、或點に於て、皆共通の性質を有つて居ります。唯だ、少しづゝの相違のあるのはR、K、Mといふやうな、斯ういふ構成的の要素及びこの他の言語分化の形式如何によつてであります。此の言語意識の相違は、極めて微妙なものでありまして、どうも、明白に甲と乙とを分ち、截然と範疇を立てるといふことは困難でありますが、シルといふ語は或物事を精神的に自分のものとするといふ意があり、或物事を自分のものとするといふ上からだけ見れば、シク、シムと同様であります。その動作の精神的存在を強調していふ點でそれ等の言葉とはちがつてゐます。之に對して、シクの方は活動的方面を強調していふ言葉であります。シルが精神的活動であるとすれば、シクは物質にあらはれた活動を示す言葉です。前に擧げたシクといふ言葉の萬葉集に見えてゐる用例を見ても、また、萬葉集十九に、太上天皇即ち聖務天皇が橘諸兄の邸に御出でになつた時大伴家持の詠んだ歌に

天地爾足之照而吾大皇之伎坐婆可母樂伎小里

とあるシクの例を見ても此の事は明らかである。家持の歌のシクはその場處を、太上天皇が自分の御座所となされる方の發現をいひあらはしてゐる。祝詞などに、下津磐根爾宮柱太知立とも下津磐根宮柱太敷立

ともいつてゐる。知と敷とのつかひ方も、之を書き記した人の考へ方の上から、或は知を用ゐる或は敷を用ゐると解せられる。高天原爾千木高敷といつて、千木高敷といつた例の無いといふのも、此の點から解釋せられる。又シムといふ方は、その動作の有様をいひあらはして居る語であります。兎に角、シル、シク、シムといふのは、唯今申上りましたやうに或點では相融通し合ふことの出来るものであります。物事を知るといふやうな意味から、統治の意味が、シルといふ語でいひあらはされるのも、或事柄を知るといふのは或事柄を自分のものにする譯であり、物事或は自分に對するものを自分のものにする、自分のものにするといふのが、單に上邊だけのものにするのでなくして、徹底的に自分のものにする、さういふ點からシルといふ言葉を天下を治める意味にも使ふやうになつたのだらうと考へます。シラスといふ言葉は、いふまでも無く、シルといふ言葉の敬語の形でありますが、シラスといふ言葉の意味を考へるに、單に物を知るといふ意味一方ばかり考へては、十分其の意味を了解するに困難ではないかといふやうに考へられます。それから、第二に、ウシハクの方でございますが、此のウシハクのウシを「大人」のウシと同じやうな意味に解釋するといふことは、私もさう考へて居りますのであります。此點に於ては、白鳥先生の御説以上にいふ必要がございませぬから申述べないのでございますが、但し此のウシといふのがushi「大人」の意味で、長といふ場合のossと同じ意味であるといふ御説、こゝまでは、私にも異議はないのでございますが、是が、押ossと同義であるといふ御説は、少し私の考へて居る所と相違して居りますから、此

の點に就て少し御示教を仰ぎたいと思ひます。それは、元來、「長」の方はア行のヲのヲサでござい  
ます。「押」の方はア行のオであります。ア行のヲどア行のオは、古い時代に於ては、明かに區別されて用  
ゐられて居る。又、言葉の系統の上に於ても明白な區別があると考へて居るのでございませうが、其の點か  
ら申しまして、ヲサとかオスとかいふものが、物を押すといふ意味があるといふのはどうかと考へるので  
ございませう。私は、總て、是をア行の方で解釋いたしまして、此のヲサ、それから、食國天下の Wosun  
Kuni、是等は、同じ言葉である。Wosann (治) も同じ系統の言葉である。ところが、ウシハクといふ場  
合の用例を見ますと、ウの音は總て宇の字で書いてあります。訓を借りて書いたものには「牛吐」又は  
「牛掃」と書いてありますが、古事記のも萬葉のも假名書のは、宇志波禰流、宇之波伎、宇志播言などと  
あり、延喜の祝詞式には宇須波岐とあつて、いづれも宇の字を用ひてゐます。昔の記録物其他總ての文獻  
に於てア行のウとア行のウとは同じ字が使つてあります。言換へて申せばア行のウとア行のウとだけは假  
名遣ひの上に於きましても、或は萬葉假名に於きましても區別して使はれた例は殆ど見受けないのであり  
ます。而かも尙ほ一つ積極的の例になりますのは、萬葉集の十五の卷に

比等能宇宇流田者宇惠麻佐受伊麻左良爾久爾和可禮之豆安禮波伊可爾勢武

といふ歌がございませうが、是は、同じ歌の上に、一方は宇宇流とあり、一方は宇惠まさすとあります。即  
ちウエといふ言葉は、一方ではウウルとある。古い時代に於ては宇の方の假名の遣ひ分けがなかつたこと

は、此の一首の例だけで明らかであります。さういふ點から申しますと、ウシのウは、之を、ワ行のウと見て差支なからうと考へる。それで、ヲサとウシとは同じ系統の言葉で、隨つてヲサム、食國ヲスケニのヲス、是も、同系統の言葉と見て宜からうと思ひます。

更に考へて見まするに、ウシハクといふ場合にはどうなるのであるか。先程の白鳥先生の御考では、ウシハクのハクは、ワク、(分、判)の同語でサバク(裁判する)などのハクと同じであるといふやうな御説で「大人としてさばく」意だといふことでありましたが、私は、之を、次のやうに考へたいと思ふのであり  
ます。

「食國ヲスケニ」のヲス、「治むヲサ」のヲサ、是等と同じ系統の言葉にヲシム(惜)といふ語があり、更にヲシフ(歎)といふ言葉がございます。尙ほ立返つて申しますが、此の食國のヲスといふのは、身に受入れる即ち食する意味であつて、國を治むるのは、丁度食物を身に受入れる如くであるから「食國ヲスケニ」といふのだといふのが、從來の學者の解釋でございますが、私は、物を食することをヲスといふのも、ヲスの原義から轉じたもので、食する意味のヲスから國を治むる意に轉じたのではないと考へます。ヲス、ヲサム、ヲシム、ヲシフ皆同じ種類のものであつて、すべて、散在してゐるものをついに纏めること、或は離れてゐるものを一つにするといふやうな通義を有つて居ります。ヲスに對してヲグ(招)といふ語がありますが、此も人を自分の方へ引寄せせる意味の言葉ですから、同類のものが見られます。かういふヲサ、ヲシ、ヲス

はウシウシと同系のものであり、ヲサムヲサム、ヲシフヲシフなどといふ語がこれ等から分岐して出来るやうに、ウシウシからウシフウシフといふ語が出来ます。此のウシフウシフからウシハクウシハクといふ語が出来たものではあるまいか。これは、ソビユソビユ(聳)といふ語からソビヤグソビヤグ(聳)といふ語の出来るのと同じ徑路であります。現代の口語で、ユフユフ(結)といふ語からユハクユハク(結)といふ語が出来て居るのも、比較して考へるべき事でありませう。更にもう一つの旁證となりませうのは、萬葉集の卷の一、藤原の宮役民の歌に、伊蘇波久見者神イソハクミレバカミナガフヲラヒ隨爾有之とあるイソハクイソハクであります。此のイソハクイソハクのハクハクをイヲイヲ(言)がイハクイハク(曰)となると同じ形式のものを見る説もありますが、私はやはり之をソビユソビユ、ソビヤグソビヤグと同形式のもので見るとあります。さうすると、イソハクイソハクといふ形とウシハクウシハクといふ形は同じやうなものになります。さういふ風に考へて見ますと、此のウシハクウシハクといふ言葉は、ヲサムヲサムとかヲシムヲシムとかいふのと同じ系統のもので、寧ろ、是は、愛するとか、教へるとか導くとかいふのと同じ意味のものではあるまいか。今日から考へると、教へるとか或は惜むでいふのは、元來、向ふのものを導いて自分のものにするのでありまして、惜むといふのは、自分の持つて居る物を人に遣るのを惜む意味に使はれますが、此のヲシヲシの系統に屬する語でイトヲシイトヲシといふ言葉がありますが、これは、人を慈しみ愛する意味に使はれて居ります。さういふ點から考へて見ますと、ウシハクウシハクといふ言葉も、或物を自分のものとする、自分の物になるやうにするといふ意味を有つてゐるのではあるまいか。要するに、言葉の上から申しますと、シルシルといふ言葉が天下を治める意味になり、ウシハクウシハクといふ言葉が或



所を治める意味になるといふのは、前申すやうな意味が轉々して來たのではなからうかと考へます。

最後に申上げたいのは、古事記、祝詞、萬葉などに於て、どうして、一方にシラスといふ言葉があり、どうして一方にウシハクといふ言葉があるか、どうして、或場合には、此の兩語が同じやうな意味に用ゐられてゐるかといふことであります。

元來、シルといふ言葉は、御承知の如く、古事記、日本書紀から、ずつと後世まで用ゐられて居ります。無論、其の間に意義の變遷がございまして、加藤博士も度々御引きになつてゐる如くに、平安朝以後のものになりましたは、攝政關白、もつと下の階級の人のことにも用ゐられてゐますが、是は、意義の變遷の結果であつて、言葉の歴史の上から見ますれば、敢て怪しむに及ばないのでございます。然るに、古い時代、奈良朝時代の同じ文獻に於て、一方にシルといふ言葉があり、一方にウシハクといふ言葉があつて、或場合には同じやうに用ゐられ、或場合には何等か其の間に使ひ分けがあるやうに見えるのは、どういふ譯かと考へますと、私の考に依りますと、ウシハクといふ言葉は、既に、奈良朝に於ても、殆ど廢語に近いものとなつて居た言葉で、シルといふ言葉が、廣く一般的に用ゐられて居たのであらう。私共の専門の方から申しますれば、シルといふ言葉は生命を有つて益々發達する傾向を有つて居つたものであり、ウシハクといふ言葉は、前代に榮えて居た言葉であつて、奈良朝時代には纔かに餘命を保つに過ぎなかつたものではないかと考へられます。かういふ推論はどうして出て來るか申せば、古事記に於ては、ウシハ

ケル。といふ言葉は、宇志波祁流と假名書きになつて居ります。然も、其の下に、此五字以音といふ註が  
あります。古事記の文章の假名書きになつて居る部分、殊に以音といふ割註のあるものは、多くは、古事記  
の編纂された時代に於て、元からの言傳への言葉であつて、而かも、其の意味が餘り明かでないか、或  
は、他の文字を以て意譯して書現はすことの出來なかつた場合のものが多いと考へます。シラスといふ言  
葉の場合を見ると、或場合に於ては治。或は知。といふやうな漢字が其の語に當嵌めてあります。これはシラ  
ス。といふ語の意義が明らかであるから、治。知。などをあてる事が出來たからであります。併しウシハクと  
いふ言葉は、どういふ漢字を當嵌めて宜いか、既に、其の時代の人々が、言葉の意義を明瞭に辨へないで  
唯だ、慣例に従つて、若くは言傳へに依つて、此のウシハク或はウシハケルを使つて居つたのではないか  
と思はれます。萬葉集にはウシハクといふ言葉は所々に使つてはございますが、いづれも皆、萬葉假名若  
くは全くの假借の文字で書き現はされてあります。然もまた萬葉集などに用ゐられて居る場合を見ます  
と、すべて皆、神祇に關すること、神の御鎮座に關する事などに限られてゐます。言語の廢滅の場合を考  
へますに、古語の、最も永く餘命を保ち得るのは、神祇などに關する部門に於てであります。ミキ(御酒)  
といふ語が、今日でも猶餘命を保つてゐる所以を見れば、此の事は明らかになります。ウシハクといふ  
語も、奈良朝時代に於て、かういふ運命の下にあつたのではありますまいか。

今日は澤山の人の御話を伺ひたいと思ひますから、甚だ簡單でございしますが、是で終りとします。